

特別支援学級における図形領域の授業の開発 —シュタイナー教育のフォルメンを基にして—

雑賀 ますみ

千葉大学大学院教育学研究科修士課程

義務教育段階の児童生徒数は減少しているにもかかわらず、特別支援を必要としている児童生徒数は増加している。それにもかかわらず特別支援学級の児童生徒数も、特別支援学級を担当する教員数も増加している。しかし、特別支援学級の担任の特別支援学校教諭免許状の保有率は 30.8%と低く、さらに特別支援教育の経験が 3 年未満である教師の割合は 40%強である。特別支援学級の担任としての経験が少ないことや、特別支援学級の学級編制が異年齢集団であること等が原因で、適切な特別支援教育がなされていない事例も少なくない。この状況を改善するために、治癒教育という側面を持つシュタイナー教育のフォルメンを基に図形領域における教材開発を試みた。学習への気持ちをつくるリズムエクササイズ、形に合わせて身体を動かす活動を十分に取り入れた授業は、特別支援を要する児童にとって、集中して取り組んだり、図形を捉えたりするには効果的であった。本論文は、筆者の令和 4 年度千葉大学大学院教育学研究科修士論文を抜粋して再構成したものである。

キーワード：特別支援学級、図形領域、シュタイナー教育、フォルメン、身体の動き

1. 問題の所在

1.1. 特別支援教育の現状と課題

義務教育段階の児童生徒数は、2009 年と 2019 年を比較すると、この 10 年間で約 1 割減少している一方で、特別支援を必要とする児童生徒数はほぼ倍増している。特別支援学級は約 2.1 倍に、通級による指導は約 2.5 倍と増加が顕著である¹。そのような中で、特別支援学級の担任の特別支援学校教諭免許状の保有率は 2021 年度では 30.8%と低い²。さらに特別支援教育の経験が 3 年以下である教師の割合は 2018 年度では 40%強である³。小・中学校において、免許もなく、経験も少ないまま、特別支援学級の担任や、特別支援コーディネーターを務めるという現実は決して少なくない。特別支援学級の担任としての経験が少ないことや、特別支援学級の学級編制が異年齢集団であること等が原因で、適切な支援が受けられないということがないように、特別支援学級向けの教材開発の推進などが必要とされている⁴。

特別支援学級に在籍している障害を持った子どもの中には、不器用さがある⁵。学習や日常生活における困難さを改善するために、身体を自由自在に使えるように支援する必要がある。

身体を動かすことを積極的に取り入れた指導として、

Masumi SAIGA : Development of Graphics
Lessons in Special Needs Classes —Based on the
Formen of Steiner Education—
Graduate School of Education, Chiba University

シュタイナー教育がある。また、シュタイナー教育には治癒教育という側面がある⁶。治癒教育では、障害をそれぞれの特性と捉え、子どもを詳細に観察し、必要な支援をする。その支援について、内海 (2001) は「障害を持った子どもの生活環境を整える際とても大切だとされることのひとつが、単調な、毎日のくり返しくり返しのリズムです」としている⁷。シュタイナー教育のフォルメンには、このような単調なくり返しのリズムがある。くり返しの大切さは、特別支援教育においても、効果的な指導とされている⁸。シュタイナー教育の中でも、教育的・治療的働きを持つフォルメンを基に授業の開発を試みる⁹。

フォルメンとは、正式にはフォルメン線描といい、「形・フォルム (Form)」という名詞の複数形と、「描く (zeichnen)」という動詞の造語で、略して「フォルメン」と呼ばれる¹⁰。

1.2. シュタイナー教育

シュタイナー教育は、正式にヴァルドルフ (Waldorf) 教育という¹¹。シュタイナー (Rudolf Steiner, 1861～1925) によって、1919 年 9 月 7 日に世界で最初に創立された、シュタイナー教育を実践する学校の名前がヴァルドルフ学校であることにちなんでいる¹²。世界にはこの 2 つの呼び名が混在するが、ここでは混乱を避けるために、通例に倣って、シュタイナー教育という名称を用いる。

2022 年度現在世界にシュタイナー学校は 1270 校、幼

稚園は1928園ある。日本には現在、全日制シュタイナー学校は7校、幼稚園は15園ある¹³。特定の教育思想が、ほぼ100年にわたって支持され世界中に広まっている¹⁴。

シュタイナー教育では、人間の一生は7年ごとに周期があると考えられている。0歳～7歳の乳幼児期を「第一・七年期」と呼び、「遊び」を通して身体を動かし意志を成長させる時期としている。7歳～14歳の児童期を「第二・七年期」と呼び、「芸術的な感動」で心を動かし感情を育む時期としている。そして、14歳～21歳の青年期を「第三・七年期」と呼び、身体と心に結合した自我活動が思考を育む時期とされている¹⁵。シュタイナー学校で行われるのは「何かになるため」の教育ではなく、あくまでも「人間として成長させるため」の教育である¹⁶。そこにはシュタイナーの人間観がある。それは、人生全体を見渡し、適切な時期に適切な学習をすることで、できるだけ効果的に教育をする。そのように教育をすることは、本人にも負担が少なく、本人の内的成長と学習内容が適切に結びつき、本人も楽しく学習するという考え方である。

しかしながら、実際のシュタイナー学校の授業はどのようにすすめていくかについて、シュタイナーは授業のカリキュラムについて、詳細を書き残してはいない。295巻ものの速記による講義録が残っているだけである¹⁷。その理由として、シュタイナー（1985）は「授業計画をどんなときもそのつど教師自身の手で作っていかねばなりません」としていたからである¹⁸。

シュタイナー教育の特徴はエポック授業と呼ばれる授業形式である。井藤（2019）によると、「エポック授業とは、午前中の約100分間、主要教科（国・算・理・社）のうち同じひとつの科目を、集中的に3～4週間学び続ける授業形式」である¹⁹。このように集中してひとつの科目を学び、次に同じ科目を学ぶのは数ヶ月後になる。それまでの間、学んだことを意識の中から遠ざけ、ゆっくりと消化させ、記憶にする。表層の知識や小手先の要領ではない、応用のきく生きる力を育むことを意図している学び方である²⁰。

また、エポック授業で学んだことは、エポックノートに絵や図や文章で色鮮やかに記録し、自分のオリジナルの教科書にする。エポックノートは、しっかりとした表紙のついた大判のノートで、上質の画用紙20枚が綴られてあり、ページとページの間には、クレヨンの色が他面に写らないように薄紙がはさま込まれている²¹。

シュタイナー教育の特徴は三つある。一つ目は、シュタイナー教育では、授業そのものが芸術的であるように工夫されていることである。シュタイナー（1985）によると以下のように芸術について述べている²²。

意志を芸術的な手段によって正しい仕方でも強めるのです。絵画や音楽による芸術的な授業をそのためにはじめから役立たせるのです。特に第二・七年期の最初の頃は、芸術による権威の教育がもっとも受け入れやすい状態にあります。

芸術的に美しく学ぶことで、学んだことが印象深くなり、記憶が鮮明に残ると考えられているのである。

二つ目は、試験や点数より「学ぶ喜び」を優先することも特徴のひとつである。「忘れること」までも含めて教育が設計されているので、シュタイナー学校には試験がない²³。テストの時点で記憶できているよりも、知識を本当の自分のものにすることが求められている。通知表も数字でなく、文章によって作成される。子どもたちは断片的な評価に一喜一憂することなく、あるがままの姿で学校生活を送るので、健全な自己肯定感を育てることができる。

三つ目は、1年生から8年生までの8年間を一人の担任が受け持つことである。子どもたちは、教師とともにじっくりと時間をかけて学びを深め、クラスメートと一緒に様々な節目を乗り越え、互いを深く知る。8年間という時間は、教師も子どもも保護者もやり過ごすことはできず、否応なく、多様な価値観を受け入れなければならない。そうした環境では、人間関係構築力が育まれる²⁴。

内海（2001）によると「シュタイナー教育の原点は障害児教育」である²⁵。そのような教育をしているシュタイナー教育には、独自科目としてフォルメンがある。フォルメンとは線を描くことで、ものの形を理解する芸術教育であり、これが特別に支援を要する児童に有用であると仮定し、シュタイナー教育のフォルメンを用いた授業の開発を試みる。

1.3. フォルメン

1919年、シュタイナーは、最初のシュタイナー学校を創設したとき、カリキュラムに新しい教科を加えた。それが、「オイリュトミー（運動芸術）」と「フォルメン線描（Formenzeichnen）」である。

シュタイナー教育において、小学校1年生の最初のエポック授業はフォルメンである。この年代の子どもたちは、動きたいという衝動を持っており、彼らに動いた軌跡を形として紙の上に描かせる。繰り返し練習をすることで、子どもたちは、形に対する感覚が成長し、体験し感じとった形を自分のイメージの世界に取り込むことができると説明をしている。

フォルメンのカリキュラムの位置づけは芸術の領域であり、文字を習う前の学習であるとともに、そこから幾何学の領域に繋がっていくとされている²⁶。フォルメン

の目的は、形を描く時に身体も動かすことで、動きから形の質感を心と身体で感じとることである。フォルメンでは、平衡感覚や距離の感覚、形を認識する力、目で見ただものを手で再現する力等を養うことも目的としている。

2. 研究の目的と方法

2.1. 研究の目的

小学校の特別支援学級における図形領域の授業を、シュタイナー教育のフォルメンを基に開発し、その効果を検証することを目的とする。

特別支援学級の特性である異学年集団でも、一斉指導でも個別指導でも、また障害が違う児童生徒の共同学習でも対応できる教材であることも検証する。

さらに、集中力が短いという特別支援学級の児童の実態から、集中力が途切れないように、10～15分のパーツで授業を構成する。そのパーツにフォルメンの特徴である身体を動かして、形を捉える活動を組み込み、その効果も検証する。

2.2. 研究の方法

千葉市内 E 小学校の特別支援学級に在籍する自閉症・情緒障害の 2 名、知的障害の 2 名、計 4 名の児童を対象に実践授業をする。授業者は筆者である。授業実践は、2022 年 9 月 7 日 (水)～9 日 (金)、12 日 (月)、13 日 (火) の 5 日間、1 校時と 2 校時の連続の 95 分間、市内 E 小学校特別支援学級 1 組の教室で行う。第 1～3 学年の異学年で、障害の種類も異なる小集団であるが、この 4 名で年度当初より、継続的に共同学習をしているというので、今回も 4 名の共同学習として実施する。初めてのフォルメンなので、全員が 1 年生の教材から始める。第 2、3 学年の児童については、応用形を個別に指導することで対応する。この授業は、算数でも自立活動でも図画工作でも、位置づけが可能な授業とする。

3. 授業の開発

3.1. 指導手順

フォルメンの指導手順については、シュタイナーは、1 時間目の線描については「直線と曲線」を扱うようにと明確に述べている²⁷。

本研究を進めていく上での指導計画として、1 学年につき 5 つの基本形、それぞれに応用形を 4 種類ずつ合計 20 種類のフォルメンを学習する計画にする。それは、異学年集団に一斉指導する場面を想定し、児童の実態に合わせ全ての種類を学習してもよいし、いくつかを選んで学習してもよい構成にする。また、直線の要素を有する

フォルメンと曲線の要素を有するフォルメンが交互になるように指導計画を立てる。

指導手順は、児童の集中力が途切れないように、1 つのパーツを 10～15 分程度に収まるように、全体を 4 つのパーツで構成する。具体的には、ウォーミングアップ、身体を使ったフォルメンの表現、フォルメン線描、フォルメンの振り返りである。また、形が感じられるような身体の動きを必ず取り入れる。この授業では、リボンや布や新聞紙等を使用したり、教室の中を歩いたり走ったりして形をイメージさせる。さらに、フォルメンを描く時も、すぐに紙に描くのではなく、描く前に紙の上で手を動かし、イメージをしてからゆっくりと描く。最後に、活動を振り返る時間をとる。このような手順で指導計画を作成する。

3.2. 指導計画

児童にとってフォルメンとしては初めての授業であるが、線描自体は、すでに何回も描いている。そこで、授業では、形を意識して描くということを大切にする。児童には、それまでの無意識での線描ではなく、形を意識した線描であり、線描から受ける感じの違いに気づかせる。シュタイナー (1985) は「授業や教育にとって最も重要なことは、普通習慣的に生活の中で行われていることを、もしこのような言い方がゆるされるなら、『意識化する』ようにすることなのです」としている²⁸。このことから、意識をすることに重点をおいて、表 1 のような計画で指導をする。

表 1 第 1 学年から第 4 学年の指導項目

第 1 学年	直線と曲線	第 3 学年	非対称図形
	渦巻き		波線 (応用)
	波線 (単線)		上下左右対称
	角		円
第 2 学年	幾何図形	第 4 学年	変容
	左右対称		結び目
	平行線		編み模様
	レムニスカー (単線)		レムニスカー (複線)
第 3 学年	上下対称	第 4 学年	ケルト模様
	波線 (複線)		フリーハンド幾何

シュタイナー学校の第 1 学年の初めての授業は、「直線と曲線」のフォルメンである。この指導計画でも、第 1 学年の第 1 時の授業の題材は「直線と曲線」にした。シュタイナー学校で取り上げているという理由の他に、ヨハネス・ケプラー (2009) が『宇宙の調和』の中で、直線と曲線について「精神の中に図形を初めて作り出す最

初の原理つまり直線と曲線を設定し、円を精神の中で思惟対象となるような仕方で運動させる」としているように、「直線と曲線」が図形の基礎であると捉えたからである²⁹。

しかし初めての授業とは言え、「直線も曲線」も児童にとっては初めての線ではない。児童は、それまでの無意識での線描ではなく、「直線と曲線の形を意識した線描」である。そして目指すのは、直線から受ける感じと曲線から受ける感じの違いに気づくことである。

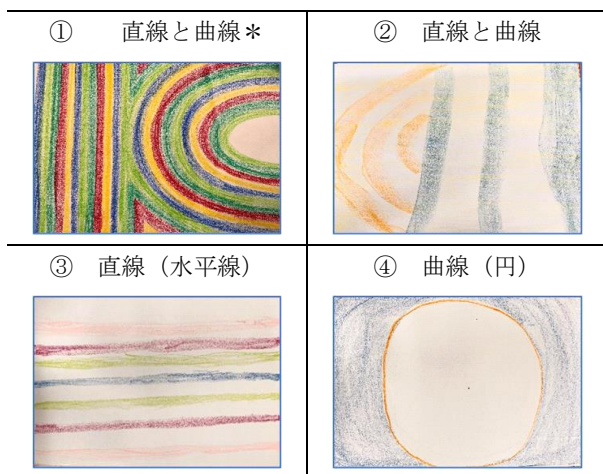
第1学年は、5種類のフォルメンを指導する。表2は、第1学年で扱うフォルメンを一覧にしたものである。①は一斉指導で、②～④は個別指導をする。

表2 第1学年のフォルメン指導計画

(こちらのフォルメンの写真は、シュタイナー学校に12年間通学し卒業した本研究の協力者が、小学生の時に描いたフォルメンの写真を使用している。*印のものは筆者が描いたフォルメンである。)

第1時:直線と曲線

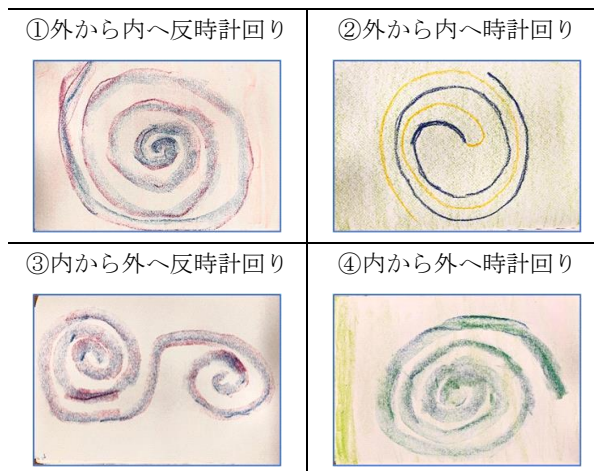
- ・自然の中で、真っ直ぐなものや丸いものを探す。
- ・教室を真っ直ぐに歩いたり、丸く輪になったりする。
- ・自分の身体を真っ直ぐにしたり、丸めたりする。
- ・直線と曲線の感じを比較して、その違いを感じる。
- ・直線と曲線の図形を描く。



第2時:渦巻き

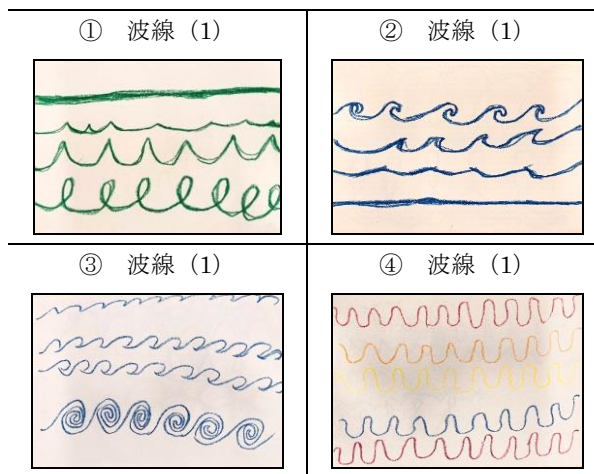
- ・長いリボンを持ち、ぐるぐる回す。
- ・いろいろな渦巻きを体感する。
- ・外から内へ渦巻く時と、内から外へ渦巻く時の感じ方の違いを知る。
- ・時計回りの渦巻きと反時計回りの渦巻きの感じ方の違いを知る。

- ・等間隔の渦巻き、間隔が広がっていく渦巻き、間隔が狭まっていく渦巻き等、いろいろな渦巻きで、感じ方が違うのを意識する。



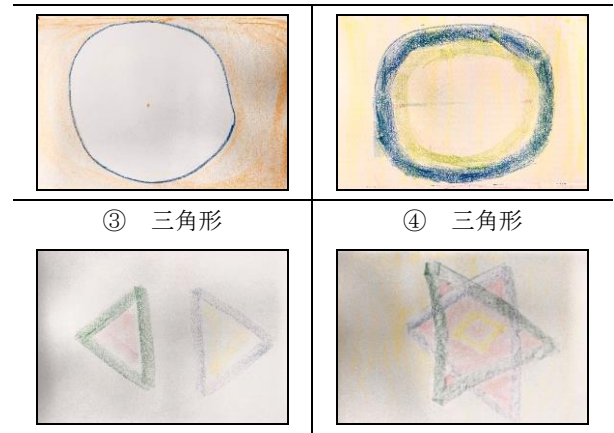
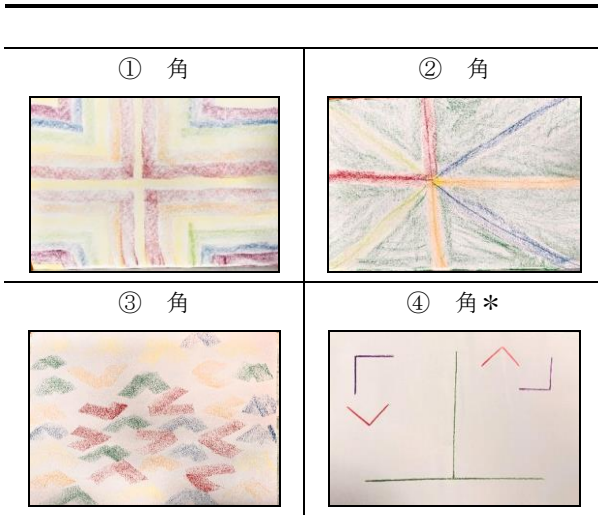
第3時:波線 (1)

- ・二人一組で、長いリボンもしくは紐の両端をそれぞれが持ち、波のように、ゆらゆら揺らしてみる。
- ・いろいろな波の形を体感する。
- ・同じ動作を繰り返すことで動きがもつリズムを感じる。
- ・言葉や歌などを使い、形とリズムの統合を感じる。



第4時:角

- ・新聞紙等を丸めて、長い筒状の棒をつくる。
- ・新聞紙の棒を真ん中で折り、角度を感じてみる。
- ・教室内の直角探しをしたり、身体で直角を表したりする。
- ・新聞紙の棒で、いろいろな角度を感じてみる。
- ・直角が狭まって尖ると鋭角になり、広がって大きな角になると鈍角になることを感じる。



第 5 時:幾何図形 (1)

- ・できるだけ正確に描くようにする
- ・シンプルな幾何学模様の円、三角形、四角形を描く。
- ・シンプルな形だけにごまかしがきかないので、バランスのとれた形を描くことに集中させる。



3.3. 特別支援学級における授業実践

第 1 学年分の授業計画は、概ね指導案通りに行えた。シュタイナー学校では、通常 1 回の授業で使う紙は 1 枚のみで、1 つの形を丁寧に描くのだが、今回の児童の実態に合わせて、紙は児童が必要とするだけを使用してよいとした。それは、児童の実態として「ゆっくり味わって描く」ということがなかなか難しく、サラサラと描いてしまう。途中、「自由に描いてもよい」時間を挟んだりしながら進めた。その実態から応用形として準備していたフォルメンにまで進めた。

その結果、児童はとても満足気で、「家に持って帰ってお父さんとお母さんに見せたい」とか、「家に飾りたい」とか満足した感想を述べていた。第 1 学年・第 1 時の学習指導案は表 3 の通りである。

表 3 第 1 学年・第 1 時「直線と曲線」学習指導案

授業者 雑賀ますみ (T1) 1 組担任 (T2) 2 組担任 (T3)

学習内容	指導の手立て・工夫	指導上の留意点	教材等
あいさつ リズムック・ エクササイズ (10 分)	<ul style="list-style-type: none"> ・あいさつと自己紹介をする。 ・丸く輪になって床に座り、お手玉を回しながら、数を数えたり、歌を歌ったりする。 ・回すお手玉の数を増やしたり、回す方向を逆にしたり、手拍子をしたりして回す。 ・身体を十分に動かし、学習の準備をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・初めての授業になるので、児童を緊張させないようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・お手玉
身体で直線を表現 (10 分)	<ul style="list-style-type: none"> ・椅子に背筋を伸ばして着席する。 ・真っ直ぐに起立する。 ・真っ直ぐに歩行する。 ・腕や足を真っ直ぐにする。 ・ゆっくりと上から下へ、空気中に大きな直線を手で描く。 ・手で描いたのと同じように、鼻先や肩先で直線をたどる。 ・目で直線を追う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・よい手本となるように、大きな動作で動く。 	
直線の線描 (25 分)	<ul style="list-style-type: none"> ・まずは空中に描き、それから紙にゆっくりと注意深く描く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・紙は机の上になっすぐに置く。 	<ul style="list-style-type: none"> 黒板 チョーク

	<ul style="list-style-type: none"> ・描くときは一筆描きで描く。 ・紙の上端の直線の始点から、紙の下端の直線の終点まで、バランスよく描く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・紙を定位置に置いたまま動かさないで描く。 ・必要に応じて、マスキングテープで固定する。 ・良い姿勢とクレヨンの正しい持ち方をこどもに示す。 	クレヨン 画用紙（エポックノート）
休憩（5分）	<ul style="list-style-type: none"> ・様子を見て、水分補給等の指示をする。 		
身体で曲線を表現（10分）	<ul style="list-style-type: none"> ・床に寝て、手足を伸ばし、身体をバナナみたいに左に湾曲させる。 ・同様に右もやる。 ・立って、腕を伸ばして、左に伸ばして、曲線を感じる。 ・右も同様にやる。 ・みんなで丸く輪になる。 ・ゆっくりと空気中に大きな円を手で描く。 ・手で描いたのと同じように、鼻で円をたどる。 ・目で円を追う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・よい手本となるように、大きな動作で動く。 	
曲線の線描（20分）	<ul style="list-style-type: none"> ・空中に描いた時のように、ゆっくりと注意深く描く。 ・同じ紙の上にゆっくりと曲線を描く。 ・紙の上部の曲線の始点から、紙の下部の曲線の終点までのバランスを保って描く。 ・直線とのバランスがとれているか、綺麗な丸みが描けているか、円弧が上下対象の形になっているか、注意しながら何度も重ねて描いて形を整える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・紙は机の上に乗すぐに置く。 ・紙を定位置に置いたまま動かさないで描く。 ・必要に応じて、マスキングテープで固定する。 ・良い姿勢とクレヨンの正しい持ち方をこどもに示す。 	黒板 チョーク クレヨン 画用紙（エポックノート）
直線（水平線と鉛直線の交差）（10分）	<ul style="list-style-type: none"> ・空中に描いてから、ゆっくりと注意深く紙に水平線を描く。 ・描くときは一筆描きで描く。 ・紙の左端の水平線の始点から、紙の右端の終点までの距離をみて、真ん中に鉛直線を描く。 ・小さすぎず、大きすぎず、美しく描く。 ・水平線と鉛直線の違いを感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・紙は机の上に乗すぐに置く。 ・紙を定位置に置いたまま動かさないで描かせる。 ・必要に応じて、マスキングテープで固定する。 ・良い姿勢とクレヨンの正しい持ち方をこどもに示す。 	黒板 チョーク クレヨン 画用紙（エポックノート）
ふりかえり（10分）	<ul style="list-style-type: none"> ・直線と曲線、水平線と鉛直線、それぞれを描いた時に感じたことを述べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・こどもの感性に興味を示して受け止める。 	

3.4. 授業実践の検証

今回の授業実践は、第1学年の授業の5回分を行った。1回の授業は第1校時と2校時の連続で、95分間で実施した。合間に適宜休憩をとった。この95分間というのは、シュタイナー学校のエポック授業が、午前の時間帯に行われることに習い、午前中に実施した。

事前にそれぞれの基本形の題材に対して4種類の応用形のフォルメンを準備して授業実践に臨んだ。

指導手順として、10～15分程度のパーツで授業を構成したので、児童の集中力が途切れることがなかった。

障害も学年も異なる小集団に対して一斉指導が可能な授業の開発という観点から、授業のテンポを決めるパーツの長さやコンテンツは重要な観点であることを再認識した。

授業開始後の「リズムック・エクササイズ」は、学習を始めるといった雰囲気になるのに効果的であった。

今回の授業実践におけるリズム・エクササイズは、お手玉を使ったエクササイズであった。具体的には、丸く輪になって座り、数を数えたり、歌を歌ったりしながら、お手玉を回していくというものにした。始めは 1 個のお手玉を回し、慣れてきたら 1 個ずつ増やし、最後は 5 個にするというように難易度を上げて行った。

次の「形に合わせて身体を動かしたり感じたりする活動」だが、この活動は児童には人気があり、集中して取り組んでいた。授業実践した活動は、表 4 のとおりであるが、形に合わせて身体全体を動かしたあと、目や鼻や肩などでも形をなぞるようにした。

表 4 第 1 学年・第 1 時～第 5 時において実践した形を身体で表現する活動

第 1 時 直線と曲線	<ul style="list-style-type: none"> ・背筋を伸ばして着席、起立、歩行する。 ・腕や足を真っ直ぐにする。 ・床に寝て、手足を伸ばし、身体をバナナみたいに左に湾曲させる。 ・全員で丸く輪になり、空気中に大きな円を手で描く。
第 2 時 渦巻き	<ul style="list-style-type: none"> ・渦巻きのお話を聞く。 ・リボンをクルクルと回して見て、渦巻きを可視化する。 ・身体を風に吹かれる木の葉のようにぐるぐる回す。 ・腕をゆっくりと回して、空気中に螺旋を描く。
第 3 時 波線 (単線)	<ul style="list-style-type: none"> ・長い布の両端を二人でもって、波をイメージしてパタパタさせてみる。 ・いろいろな動物の歩き方を想像しながら教室の中を歩いたり、スキップしたりする。 ・海の波の変化をイメージしながら、身体を動かしてみる。
第 4 時 角	<ul style="list-style-type: none"> ・教室の中にある直角を探す。 ・身体の部位で表せる直角を探す。 ・立ったり、座ったりして、直角を感じる。 ・腕や手を動かしたり、鼻先や肩先を動かしたりして、直角を感じてみる。
第 5 時 幾何図形	<ul style="list-style-type: none"> ・手で空中に上からゆっくりと円を描く。 ・同様に三角形を描く。 ・同様に四角形を描く。

このように十分に身体で形を表した後、フォルメンを紙に描くのだが、すぐには描かず、紙の上で十分に空描


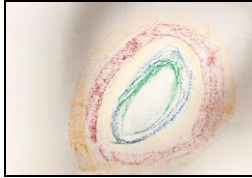

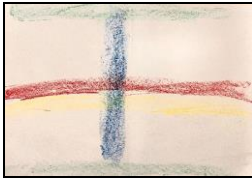
きをし、イメージしてから描くようにした。そして、最後に、描いたフォルメンについて「どんな感じがしたか」を述べ合った。

第 1 学年・第 1 時「直線と曲線」の授業実践の検証としては、「直線」や「曲線」などを体感する動きをする時に「シャッキー」等の擬態語を使うと、分かりやすかったようであった。また、十分に動いてから、紙に描かせようと、クレヨンと紙を説明より先に配った。児童は待ちきれず、説明を聞く前にいろいろと描き始めてしまった。描きたくてウズウズしていたので、まず「ゆっくり」と描くことを話してから、クレヨンや紙を配るという手順に改善する必要がある。それは、どんどん描き進めてしまう児童に対して、授業者は何回も「ゆっくり」と言っていたからである。児童には、ゆっくりと形を味わわせて描かせたいと計画していたので、この手順は改善が必要である。しかし、紙を先に配ってしまったので、最終日までに「ゆっくり」と描けるようになればよしとすることにした。

予想以上に形を描くのが早く進んでしまうので、紙を次々に交換する必要がある。先に必要な枚数を配布しておくという方法もあるが、今回は児童一人一人に、「交換してよいですか。」と声を掛けながら、紙を交換することにした。これが、コミュニケーションとしては良かった。応用形のひとつとして考えておいた活動は、クレヨンの色を変えて、基本形の線の隣に描き足すということであった。これが、児童の実態と合致したようで、8 色あったクレヨンを使って直線を描き足していた。

想定外だったのは、児童が「自由に描きたくて仕方がない」という素振りを見せたことであった。そこで、個別に「自由に描いていいよ」と声を掛け、落ち着かせた。第 1 学年・第 1 時「直線と曲線」で児童が描いたフォルメンは表 5 の通りである。

表 5 第 1 時で児童が描いたフォルメンの記録

直線 (鉛直線)	曲線
	
直線と曲線	直線 (鉛直と水平線)
	

今回の実践授業において、知的障害を持ち、右半身麻

痺のため右手に力が入らず、なかなか思うように描くことができない児童がいた。その児童は最終日の復習の時、力強く直線を描き、「描けた」と喜んで発言した。その様子からもこの授業の有意を認識した。

4. 研究のまとめ

4.1. 結論

本研究では、シュタイナー教育のフォルメンを基に、特別支援学級の図形領域の授業の教材を開発し、その効果について明らかにすることを目的とした。具体的には、特別支援学級の特性を考慮して、学習指導が一斉でも個別でも、異学年集団でも、また障害が違う児童生徒の共同学習において対応できる教材であることが重要であると捉えていたので、基本形のフォルムを各学年5種類に絞り込んだ。そして、その基本形に対して、応用形を数種類構築した。

特別支援学級の児童だけではないが、児童の集中力は短いことが多いという現実から、児童が集中できるように授業を組み立てた。今回はフォルメンで、形にこだわって身体を動かすというパーツを組み入れて授業を構成した。そのパーツとは以下の通りである。

- (1) リズムエクササイズで学習に向かう気持ちをつくる。
- (2) フォルムに合わせて身体を動かして、身体で感じさせる活動をする。
- (3) 直ぐに紙に描くのではなく、クレヨンを持って、紙の上で空書きをしてから描く。
- (4) ゆっくり味わって描く。
- (5) 感想を言う。

図形を学ぶ楽しさが感じられるように授業の開発をしたが、授業後の児童から、「描いた作品を家に持って帰って、親に見せたい」とか「自分の部屋に飾りたい」とかの感想が寄せられた。自分の作品に満足している様子が見て取れた。また、児童の「これ（この作品を）美術館に飾ってほしい」という発言には、児童の達成感が伝わってきた。

これらのことから、開発したこの授業は、特別支援学級の自立活動、算数の平面図形に関する学習、図画工作の形や色に関する学習等で展開できる可能性を有している。以上の理由から、開発した授業は特別支援学級の児童にとって、有意な授業になり得ると考察する。

4.2. 今後の課題

現在、特別支援学級向けに開発された学習指導要領は存在せず、指導の目標や内容の選択やその決定等は特別支援学級の担任の裁量に委ねられている。しかし、特別支援学級の担任の半数は特別支援学校免許状を持たず、経験年数が少ない者も多い。加えて、特別支援学級向けの教科書は作成されておらず、適切な教材を自作する場合には多く時間を必要になるという現状である。今後の課題として、特別支援学級向けの教材開発の推進が必要であると考えられる。

その指針として、特別に支援を要する児童生徒の実態に合ったものにする必要がある。彼らが「生きていく上で大切な、『学ぶ楽しさ』を学びたい。」と思えるような教材であることが望ましいと考えられる。

-
- ¹ 文部科学省 (2021a)、p.1
 - ² 文部科学省 (2021b)、p.5
 - ³ 横尾ら (2020)、pp.11-17
 - ⁴ 河村 (2017)、pp.115-123
 - ⁵ 戸田 (2013)、pp.119-120
 - ⁶ 日本アントロポゾフィー医療の会 (2022)、pp.49-57
 - ⁷ 内海 (2001)、p.31
 - ⁸ 文部科学省 (2021c)、p.136
 - ⁹ 吉澤 (2022)、p.21
 - ¹⁰ Kutzli (1985)、石川訳 (1997)、p.4
 - ¹¹ 寺石 (2021)、p.98
 - ¹² 寺石 (2021)、p.98
 - ¹³ 自由ヴァルドルフ教育連盟による国際加盟校一覧 (2022)、pp.9-10
 - ¹⁴ 寺石 (2021)、p.98
 - ¹⁵ 井藤 (2019)、p.65
 - ¹⁶ 寺石 (2021)、p.97
 - ¹⁷ Gemeinsames Projekt der Pädagogischen Sektion am Goetheanum ら (1997)、鳥山、フォーグル訳 (2021)、p.15
 - ¹⁸ Steiner (1966)、高橋訳 (1985)、p.203
 - ¹⁹ 井藤 (2019)、pp.175-176
 - ²⁰ 井藤 (2019)、pp.180-181

- ²¹ 井藤 (2019)、pp.177-179
- ²² Steiner (1966)、高橋訳 (1985)、p.13
- ²³ 井藤 (2019)、pp.180-181
- ²⁴ 寺石 (2021)、pp.103-106
- ²⁵ 内海 (2001)、p.30
- ²⁶ Kranich ら (1992)、(森訳 (1994)、p.8
- ²⁷ Steiner (1966)、高橋訳 (1985)、pp.61-63
- ²⁸ Steiner (1966)、高橋訳 (1985)、p.60
- ²⁹ Kepler (1619)、岸本訳 (2009)、p.306

引用文献

- Gemeinsames Projekt der Pädagogischen Sektion am Goetheanum und der Pädagogischen Forschungsstelle beim Bund der Freien Waldorfschulen (1997) „Zur Unterrichtsgestaltung Im 1 Bis 8 Schuljahr an Waldorf-/Rudolf Steiner Schulen“ Verlag am Goetheanum (鳥山雅代、ヴィリギリウス・フォーグル訳 (2021)『シュタイナー学校の全カリキュラム 第1～8学年編』特定非営利活動法人東京賢治の学校・水声社)
- 井藤元 (2019)『シュタイナー教育』日本能率協会マネジメントセンター自由ヴァルドルフ教育連盟 (2022) 国際加盟国一覧 https://www.freunde-waldorf.de/fileadmin/user_upload/images/Waldorf_World_List/Waldorf_World_List.pdf (2022.11.15 最終確認)

- 河村優詞 (2017) 「小学校知的障害特別支援学級の社会的状況—要請と課題—」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要 No.18』pp.115-123 <https://gssc.dld.nihon-u.ac.jp/wp-content/uploads/journal/pdf18/18-115-123-Kawamura.pdf> (2022.11.15 最終確認)
- Kepler, J. (1619) “*Harmonice Mundi*” (岸本良彦訳 (2009) 『宇宙の調和』 工作舎)
- Kranich, E. M. / Jünemann, M. / Hildegard, B.-A. / Bühler, E./ Schubert, E. (1992) “*Formenzeichnen*” Verlag Freies Geistesleben GmbH Stuttgart (森章吾訳 (1994) 『フォルメン線描 シュタイナー学校での実践と背景』 筑摩書房)
- Kutzli, R. (1985) “*Entfaltung schöpferischer Kräfte durch lebendiges Formenzeichnen*” Novalis Verlag, Schaffhausen (石川恒夫訳 (1997) 『フォルメンを描く シュタイナーの線描 I』 晩成書房)
- 文部科学省 (2021a) 「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告 参考資料 10」
https://www.mext.go.jp/content/20210412-mxt_tokubetu01-000012615_10.pdf (2022.9.8 最終確認)
- 文部科学省 (2021b) 「特別支援教育飼料第 2 部資料編」
https://www.mext.go.jp/content/20221206-mxt_tokubetu02-000026303_3.pdf (2023.2.27 最終確認)
- 文部科学省 (2021c) 「障害のある子供の教育支援の手引き～子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて」
https://www.mext.go.jp/content/20210629-mxt_tokubetu01-000016487_02.pdf (2023.2.27 最終確認)
- 日本日本アントロボゾフィー医療の会 (2022) 『アントロボゾフィー医療 100 周年記念祭 生命をてらす力』 日本アントロボゾフィー医療の会
- Steiner, R. (1966) “*Erziehungskunst – Methodisch-Didaktisches*”. GA294, Vortrag, S. 56. Dornach” (高橋徹訳 (1985) 『教育芸術 1 方法論と教授法』 筑摩書房)
- 寺石悦章 (2021) 『人間観と教育』 寺石研究室
- 戸田剛 (2013) 「知的特別支援学校における不器用な子どもへの支援—動きづくりの指導による自己調整力や日常生活動作、学習動作の向上を目指して—」『静岡大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻成果報告書抄録集』
https://shizuoka.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=6300&item_no=1&page_id=13&block_id=21 (2022.12.16 最終確認)
- 内海真理子 (2001) 「シュタイナー教育を学校現場に」『いのちに根ざす日本のシュタイナー教育 日本ホリスティック教育協会 吉田敦彦、今井重孝編』せせらぎ出版
- 横尾俊・平沼源志・村井敬太郎・涌井恵・半田健・清水潤 (2020) 「知的障害特別支援学級の教育内容・方法等に関する全国調査報告」『国立特別支援教育総合研究所ジャーナル第 9 号』
https://www.nise.go.jp/nc/report_material/research_results_publications/kiyou_jurnal_bulletin (2022.9.1 最終確認)
- 吉澤明子 (2021) 「アントロボゾフィー医療における絵画・造形療法」『アントロボゾフィー医療 100 周年記念祭 生命をてらす力』 日本アントロボゾフィー医療の会

謝辞

2 年間、ご指導を賜りました千葉大学教育学部藤川大祐先生、また検証授業にご協力いただきました小学校の児童・教職員の皆様に心から感謝申し上げます。